大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

白居易の詩についての二、三の考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加龍, 秀明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007930

白居易の詩についての二、三の考察

加龍秀明*

序

この論述は、詩を通してみた人間性の研究の一端である。今、中唐にその焦点を当ててみたい。中唐に詩を求める者は、韓愈・孟郊・元稹・白居易の名を必ず口にするであろう。韓・孟の奇警に対して元・白の坦易とは趙翼が『甌北詩話』で指摘するところであるが、この二つの流れが当時を代表するものであって、その後者の流れの代表的詩人白居易の杭州に赴くまで、すなわち穆宗長慶二年、白居易五十一歳までの詩をここに取り上げ、白居易の前半の詩を通して、詩の特異性と合わせてその人間性の考察の一端としたい。

さて、何故白居易五十一歳までに限ったか。この点につき少しく説明を加えておきたい。「自從苦學空門法、銷盡平生種種心、唯有詩魔降未得、每逢風月一閑吟」〈閑吟〉と歌っているごとく、彼の脳裏から一時とて詩が姿を消す事は無かった。彼は一生涯詩を作らない時とてなく、「凡平生所慕所感所得所喪所經所迫、一事一物已上、布在文集中……」〈醉吟先生墓詩銘〉と述べられているように、心に映るすべての事象が詩となり得たのである。現在我々が見る詩（広義に解釈して）は、二千八百余首（文を含むと約三千八百余首であるが、文はここでは対象外とする）の多きにのぼり、唐代詩人の数ある中でまれにみる存在である。今、この詩を一時に取り扱うにはあまりに紙数が限られている。従って、彼の作品を二期に分割する必要が生じた。二分するのに杭州に赴く時、すなわち長慶二年十月をもってした。この年、彼は中央にて中書舎人知制誥から外任を求め、杭州史刺に除せられ当地に達したのであった。さて、元稹が記した白香山集序にあるごとく、長慶四年十二月に元稹が編定した白氏長慶集は、白居易が杭州を去るに当って、彼自身のそれまでの作品を一括して元稹の手許に残していったもので、元稹の手によって文集五十巻として完成されたものである。故にこの長慶集五十巻は、彼の前半の作品の総まとめと言って差支えない。「白氏前著長慶集五十巻、元微之爲序、後集二十巻、自爲序、今又續後集五巻、白爲記、前後七十五巻、……」〈白氏集後記〉とあるように、これ以降の詩を後集と白居易自身も記しているのであって、この時をもって彼の作品を二分割するに足る時であると思われる。ただ注意すべきは、白氏長慶集五十巻に取り上げられた作品は、長慶二年までの白居易の作品であって、それが整理され元稹の手許に送られた訳である。すなわち「前三年、元微之爲予編次文集而叙之、凡五帙、每帙十巻、訖長慶二年冬、號白氏長慶集、……又從五十一以降、卷而第之……」〈後集序〉に示されるごとく、編定の時期は、四年であっても二年冬までの白居易の作品が収められているのである。また、長慶二年までの詩は、約一千四百首であり、それ以降（後集）の作品も一千四百三十余首で、その首数においてもそれ程片寄っていない。加えるに白居易の特異性を見るに足る詩は、前半に多く存在している。以上の観点から長慶二年、彼五十一歳までの詩を前半として取り上げ、彼の詩についてまず内面的にいかなる変化を見せるか、すなわち歳月と共に彼自身いかに成長していくかを三期に分けて考察し、その後で彼の詩における特異性を通して二、三の考察を試みたい。

一、歳月と共に

第一期

十五、六歳から二十九歳進士合格まで。この期の作品は、極めて少数しか存在しない。すなわち巻九の感傷詩の数首と巻十三の律詩の一群を中心に他に散見し得るもの合わせて六十首前後であると推定されるが、その作品の傾向はいかなるものであろうか。彼十八歳の作に「久爲勞生事、不學攝生道、年少已多病、此身豈堪老」〈病中作〉と言い、又、二十九歳の作に「病逢佳節長歎息、春雨濛濛榆柳色、羸坐全非舊日容、扶行半是他人力、誼誼里巷踏青歸、笑閉柴門度寒食」〈寒食臥病〉と歌っているがごとく、彼は若き頃より病身であった。以後彼の病に関する詩は、すこぶる多く、この病が彼をして貧苦と共に将来の処生のあり方を決定させる一大要

因となった事は見逃せない。病による孤独感、寂寥感が彼の心の中に常に存在していたと同時に貧苦、流浪が彼を苦しめた。「苦乏衣食資、遠爲江海游、光陰坐遲暮、鄉國行阻脩、身病向鄱陽、家貧寄徐州、……」〈将之饒州江浦夜泊〉とあるごとく、病身、貧苦そして望郷の愁いの生活が彼の青春時代であったと言える。病苦の身に加えて、特に懐しい肉身のいる故郷を思う心が彼を愁えさせた。すなわち「故園望斷欲何如、楚水呉山萬里餘、今日因君訪兄弟、數行鄉淚一封書」〈江南送北客因憑寄徐州兄弟書〉「感時思弟妹、不寂百憂生、萬里經年別、孤燈此夜情、病容非舊日、歸思逼新正、……」〈除夜寄弟妹〉「扁舟泊雲島、倚棹念鄉園、……」〈秋江晩泊〉等の詩となって、その思いは夢にまで現われた。「旅愁春入越、望夢夜歸秦」〈江樓望歸〉。つまり、若き詩人の心は、孤独と寂寥の中に置かれて感傷的にならざるを得ない。又、「南鄰北里歌吹時、獨倚柴門月中立」〈寒食月夜〉「軒車歌吹誼都邑、中有一人向隅立」〈長安早春旅懷〉「明月春風三五夜、萬人行樂一人愁」〈長安正月十五日〉の句に見られるごとく、世間に一人取り残された自己の姿を見て常に心が晴れない寂しさを感じた。そして、自己の身より発する孤独、寂寥感は、自己以外の事象を見るにつけても彼を感傷的にさせた。その例として「妓堂賓閣無歸日、野草山花又欲春、……」〈過高將軍墓〉があげられる。すなわちいかなる栄誉を得ようとも、死と共にはかなく消え再び現われる事もないが、草木は春を得ては栄えると言う。〈賦得古原草送別〉にても同じく人事のはかなさと自然の永遠性を通して青春の感傷を歌うのである。さて、この愁いから逃れる術はないものか。ここに彼の仏道への接近を見る事ができる。「幸投花界宿、暫得靜心顏」〈旅次景空寺宿幽上人院〉と言い、又、「開時不解比色相、落後始知如幻身、空門此去幾多地、欲把殘花問上人」〈感芍藥花寄正一上人〉と言っているがごときである。すなわち彼を取り巻く種々の環境（次弟の死、父の死も含めて）からくる孤独感、寂寥感より抜け出そうとして仏門を叩くのであるが、しかし、仏道帰依に徹することができず、むしろ贈答詩からも理解し得るように多くの友人との親交を持つ事によって、彼の人間的弱み、引いては孤独感、寂寥感からの脱却を計ろうとするのである。一応、今述べてきたように第一期にあっては、愁いに満ち、寂しさに嘆く詩が多く歌われているのは、彼の心がいかに暗く感傷的であったかを物語るものである。

さて、今、二十九歳進士合格までの詩を一つのグループと見なして論じてきたが、第二期に入るまでに取り上げねばならぬのは、進士及第の後、校書郎の職に就くまでの間、すなわち二十九歳から三十一歳までの間に作られた一群の詩である。この期間は第二期に含めてもよいが、彼がまだ官職に就かずにいた時代であって、第二期の特徴を表わしていないし、又、第一期とはまったく詩情が異っているのでここに取り上げた訳である。他の期間に比較すると、さして言を重ねる程の重要性を持たぬと考えられるので簡単に言及して置く。「去歳歡遊何處去、曲江西岸杏園東、花下忘歸因美景、樽前勸酒是春風、……」〈酬哥舒大見贈〉のごとく、進士合格の当時は曲江や杏園に遊び人生を謳歌し、又、「得意減別恨、半酣輕遠程、翩翩馬蹄疾、春日歸鄉情」〈及第後歸覲留別諸同年〉と得意満面、前期に見られない歓喜と意気が感じられる。〈與元九書〉にあるように、十五、六歳にして進士試験のある事を知り、二十にして昼は賦を夜は書を課し、暇を見つけては作詩し、寝る時とても無かったその努力が報いられたのであるから、その喜びも並大抵ではなかった。又、彼にはこの及第のみですべてが解決したのではない。次に来るものは官職の栄と生活の資を得ることであった。「擢第名方立、躭書力未疲、磨鉛重剸割、策蹇再奔馳、相馬須憐瘦、呼鷹正及飢、扶揺重即事、曾有答恩時」〈叙徳書情四十韻、上宣歙崔中丞〉。この詩は就職の推薦を願ったものではあるが、そこには官職に対する熱意が、そして執着が表われている。要するに、第一期にては見られない喜びと未来に対する夢が彼を生き生きとさせた時期である。

第二期

三十一歳から四十四歳江州司馬に至るまで。彼の作品中最も注目に値する時期である。彼は、三十一歳冬、試判抜萃科の試験に及第して初めて校書郎たる職を与えられた。次いで三十五歳にして才識兼茂明於体用科に応じ四等で入り、盩厔県尉に除せられ、三十六歳で集賢校理に移り翰林学士を授けられ、三十七歳にて左拾遺に除せられた。又、この年彼は妻を得た。三十九歳の五月、彼は京兆戸曹参軍に除せられ、次いで四十歳にしてその母を失い退いて渭上に暮した。しかし、四十三歳の冬、再び入朝し太子左賛善大夫に任ぜられるも彼四十四歳すなわち元和十年、時の宰相武元衡が殺害せられた事件につき上疏して、諫官達の反感を買い江州司馬に左遷されたのである。この波乱に富んだ時期を第二期とする。この期間の彼は、最も儒的立場に忠実であり、職務に熱意を持って当った。詩作も活発であり、作品数は非常に多く、前期に比して情熱的な長編へと移っていく。その作品の内容は大体次の三種に分類できるのであって、いわゆる諷諭詩、閑適詩、感傷詩と彼が分類しているそのすべての内容を含んでいるのである。諷諭詩は左拾遺の職にあった時を中

心に、閑適詩は渭村退居の時に多く、又、感傷詩は第一期の延長としてこの期間全般に渡っているのである。ただこの期間を特徴づけるのは、第一期に見られない諷諭詩と閑適詩の出現である。〈與元九書〉の中で、彼はその立場を明らかにしているが、換言すれば、諷諭詩とは「出則兼済天下」、閑適詩とは「退則独善其身」の精神であると解することができる。かかる意味で諷諭詩と閑適詩とは表裏一体のもので、政治家の一員としての自覚に基づく作品となり得た。

さて、諷諭詩をまず取り上げて見よう。白氏長慶集巻一の〈賀雨〉以下六十四首、巻二の五十八首と巻三、四にまたがる新楽府五十首の計一百七十二首がその作で、これ程多くの諷刺的作品を歌ったのは、中国文学史上まれにみる存在である。ところで、彼自身〈與元九書〉の中で諷諭詩を最も意義のある存在として取り上げているが、その作品の対象は多岐に渡るもので、上は天子を戒め政治家たる者の反省を促し、下は重税、戦役に苦しむ農民の姿を写し出す。社会の不平等性をつくと同時に人倫について説き、社会の風俗を批判すると言った具合である。第一期においては、彼を感傷家として位置づけたが、感傷とは理想の追求の過程において、その挫折として起る。仮に自己の理想の発揚可能な場、日の当る所に置かれる場合には、逆に異常な情熱に変り得る。彼は中央の諫官の置位にあったればこそ、当然政治家としての理想を歌い上げたのである。ただ惜しむらくは、彼の実生活から来る感情が映らず、それだけに切実感に欠けるものがある。彼が農民としての苦しみも、兵卒としての戦いもその体験を持たぬ限り、理想とする政治、社会を夢見る為の抽象的表現に過ぎないとも言い得る。かの杜甫の実体験から来る叫びに比して迫力に欠けるのも当然と言えよう。「總而言之、爲君、爲臣、爲民、爲物、爲事而作、不爲文而作也」〈新楽府序〉と言っているごとく、諷諭詩は政治家としての手段であり、文学としての目的意識を持つものではなかった。それだけに為政者に厳しく訴えるものがあるものの、一般人に詩としての感動を呼び起すものではなかったと考えられる。当時はむしろ感傷詩の長恨歌（後述する）の類が一般に賞讃された事実は、その間の事情を語るものであろう。

さて、この期を特徴づけるもう一つの流れは、前述した閑適詩の存在である。「今我猶未悟、往往不適意、胡爲方寸間、不貯浩然氣、……唯當飲美酒、終日陶陶醉……」〈感時〉。述べる所、幾ばくかの人生に名利の奴となり日々富貴栄達を望むの愚を悟り、愁いを払ってただ心を無にし、終日陶々と酔うの境地を歌っている。又、「葛衣禦時暑、蔬飯療朝飢、持此聊自足、心力少營爲、……」〈官舎小亭閑望〉においても足るを知り、心力を労して小事にこだわらない境地を述べる。この傾向は、渭村退居（母の喪に服す）の時に強く打ち出されるのであって、「十年爲旅客、常有飢寒愁、三年作諫官、復多尸素羞、有酒不暇飲、有山不得遊、豈無平生志、拘牽不自由、一朝歸渭上、泛如不繫舟、置心世事外、無喜亦無憂、……」〈適意二首〉とあるごとく、　村の自然の中にある彼の境地、すなわち渭村退居を中心として作られた作品の方向を少なくとも裏書きしているのである。では彼は完全に自由人たり得たか。必ずしもそうではない。この頃の作に〈効陶潛體詩十六首〉や〈遊悟眞寺一百三十韻〉等がある。前者は、陶潛が超俗的な自然詩人として酒を心から愛したに対して、なお人事に執着し、自ら報われざるを酒にて紛らすと言った感が強い。ところで諷諭詩においては、社会という大きな対象に対して自己の主張を動的、積極的に歌い上げるが、この閑適詩は、消極的に自己一身の在り方、すなわち儒的独善を言うのであり、足るを知り和を保ち情性を喜び歌うが、その根底には願望の抑制があり、満たされざる苦悩からの逃避が存在する事を見逃すことはできない。又、「……外服儒風、内宗梵行……」〈和夢遊春詩一百韻序〉と言うがごとく、儒的独善の立場は、やがて徹し切れないまでも仏道すなわち煩悩解脱の道に通じ、ひいては老荘の無為の思想にも通じる事となる。

さて、第二期の諷諭、閑適の詩は、彼の場合必ずしも相反する立場のものではなく、前述したごとく表裏一体、すなわち対象を外（政治）に求めるか内（自己）に採るか、あるいは公的立場と私的立場のいずれを先んずるか、そして又、生活の場の違いに過ぎないと見るのである。従って、ほぼ同時期に並び歌われたとしても決して差支えないのである。

第二期において特徴ある諷諭詩、閑適詩とは別に、第一期の延長と見なされる感傷詩について述べておく。「豈獨花堪惜、方知老暗催、何況尋花伴、東都去未廻、詎知紅芳側、春盡思悠哉」〈西明寺牡丹花時憶元九〉。この句から見られるように、一方で自己の老いる姿に心を致し、一方では「尋花伴」、すなわちかつて花見を共にした友、元稹と遊賞できず独り置かれている寂しさを嘆く訳であるが、第二期以降の感傷詩は、この老いの来る人生の寂寥感と友人との別離の愁いを歌っているものがほとんどである。特に独り置かれる身の悲しみは、彼の少時の環境から来る孤独感に通じる。彼は、この寂しさを友に語りかける事によって慰めとした。いかに多くの友人と唱和し、贈答詩を交わしたかがこの間の事情を物語っていると思われる。長恨歌（後述する）も恐らくは人事のはかなさに加えて別離の悲しみがその主

題として歌われているものと考えられる。

以上述べて来たように第二期は、彼が最も情熱を傾けて生きた時期であり、その作品も諷諭、閑適、感傷と彼の意図する所を述べ尽している。それだけに人々の心に訴えるものが多いのも当然であると思われる。特に諷諭詩は、この期以外に見当らないのも第二期の特色である。

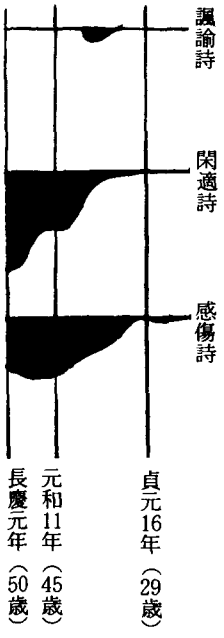
ここで少しく注意しておきたいのは、律詩の存在である。一体、新体詩すなわち律詩を彼は古詩のごとく意味の上から諷諭、閑適、感傷の三分野に分類していない。彼自身は、「又有五言、七言、長句、絶句、自一百韻至兩韻者四百餘首、謂之雜律詩、……非平生所尚者」〈與云九書〉と言っているが、私はこの律詩も内容上三分類して考えの対象とした事を付け加えておく。

第三期

彼四十四歳、江州司馬に除せられてから忠州刺史を経て、四十九歳の冬、中央に再び召し返され、以後五十一歳十月に自ら外任を求めて、杭州刺史として赴くまでの間の詩を取り上げて論じよう。この間の作品は、おおむね感傷詩と閑適詩の二つの流れに分けられる。前者は、「潯陽僅四千、始行七十里、人煩馬蹄跙、勞苦已如此。」〈初出藍田路作〉や「船中有病客、左降向江州」〈舟中雨夜〉に見られるごとく、初めて遠く江州司馬に左遷された身の不遇を嘆いて歌ったものである。そして、蝉の声にも「一催衰鬢色、再動故園情」と嘆く。左遷の身の悲哀は、見るもの聞くものすべて彼をして愁えせしめた。〈山鷓鴣〉、〈放旅雁〉、〈琵琶引〉等がそれである。又、かつて長安で共に職にあり遊賞した友人、元稹の事など思い起こせば、夢となって現われた。「夜夢歸長安、見我故親友」〈夢與李七庚三十三同訪元九〉。この悲しさ、寂しさは忠州においても同様消えることが無かった。「巴人類猿狖、矍蝶滿山野、敢望見交親、喜逢似人者」〈自江州至忠州〉、あるいは〈竹枝詞四首〉等がそれである。第一期、第二期を通じて流れている感傷の詩は、環境の激変すなわち中央からの左遷という事実により、一層孤独感、寂寥感を深めていった。しかし、一方こうした愁いは、江州左遷以降、〝仏教思想〟、〝自然〟そして、「肺病不飲酒」とあるので一時期は控えていた〝酒〟に結び付くのである。これは愁いからの逃避であって、やがてはすべてを忘れ、運命に従順なろうとするのである。すなわち「宜懷齊遠近、委順隨南北、歸去誠可憐、天涯住亦得」〈委順〉の句がそれである。ところで彼は忠州刺史を経て、再び中央に帰ることになったが既に四十九歳であった。「中間十四年、六年居謫黜、窮通與榮悴、委運隨外物、……近辭巴郡印、又乗綸闈筆、晩遇何足言、白髪映朱紱、消沈昔意氣、改換舊容質」〈曲江感秋〉のごとく、中書舎人知制誥の地位にありながら、かつての政治的情熱もなく、初めて江州に流された頃の悲哀に満ちた気持ちもいつしか薄れ、ただ老いを嘆くを除いては運に任せる事を歌うのみであった。青春の孤独感、寂寥感から発した感傷詩は、別離の愁い、左遷の悲哀を経てやがて過去の追憶と老いの嘆きのみを歌うこととなる。

さて、一方閑適詩はどうであろうか。これは第二期の延長と見なしてよい。「行年四十五、兩鬢半蒼蒼、清瘦詩成癖、粗豪酒放狂、老来猶委命、安處即爲鄕、或擬廬山下、來春結草堂」〈四十五〉。この詩は、彼四十五歳の作でこの期間の閑適詩の方向をよく表わしている。〈達理二首〉に「委順以待終」とあり天運に任せる事を歌い、又、〈郡亭〉等自然の中での生活心情に満足の意を表わす作品も多い。ここで注目に値するのは、この期における感傷詩の逃避的傾向と閑適詩との関係である。閑適詩は、もともと儒的独善の立場に立つものと述べているが、彼の場合、その出発において既に感傷詩の逃避的立場を内在するものであった。この期間になると両者は更に接近し、〝委順〟すなわち運命に従うと言う点で結びつくのであり、仏道接近の端緒ともなると考えられる。

以上三期に渡って、作品の時代的傾向を通して彼の内的変化を見てきたが、彼はいかに環境に左右され易い人物であるかが理解できる。又、感情豊かにして、時には激白し、時には愁いに沈む。しかし、江州左遷以後歳月と共に運命に従順にして悠々自適の道に向かおうとする姿を読み取る事ができる。次に、諷諭詩、閑適詩、感傷詩の年代的増減を簡単に図式化しておく。



二、特異性についての二、三の考察

其の一

『甌北詩話』に「元白尚坦易、務言人所共欲言」と評しているように、白居易の詩は平易である。この問題については種々考えられるであろう。例えば「不務文字奇」と彼自身が言うごとく、難解な用語が存在しないのもその表現を平易にする点であろう。この件に関して、今私はその平易性の一端を次のごとく指摘したい。杜甫の詩に「朱門酒肉臭、路有凍死骨」と言う句がある。巧みに最短の二句で表現された情景を白居易は次のように表現する。「昨日輸殘税、因窺官庫門、繪帛如山積、絲絮似雲屯、號爲羨餘物、隨月獻至尊、奪我身上暖、買爾眼前恩、進入瓊林庫、歲久化爲塵」〈重賦〉、「厨有臭敗肉、庫有貫朽錢、誰能將我語、問爾骨肉間、豈無窮賤者、忍不救飢寒」〈傷宅〉、「罇罍溢九醞、水陸羅八珍、……是歲江南旱、衢州人食人」〈輕肥〉、「朱門車馬客、紅燭歌舞樓、……日中爲樂飲、夜半不能休、豈知閿鄉獄、中有凍死囚」〈歌舞〉。白居易の詩は、おおむね字句多く理路整然たる具体的説明である場合が多い。又、一句の表現も「早衰因病病因愁」等の句からも類推できるように、語を重ねて説明的である。彼は言う。「毎下筆時、輒相顧語患、其意太切而理太周、故理太周則辭繁、意太切則言激、……」〈和答詩十首序〉かかる平易さは諷諭詩とも関連するものであるが、諷諭詩自体激情を表わすと共に意を明確に伝えるべき必要がある。伝達を正確にする為には筋道を立て具体化する必要がある。具体性をもって筋道を立てるとすれば、必然的に字句が多く使用される。逆に言うと字句の使用が多ければ、人々にその意を充分に理解させ得る。彼が古詩において最もその意の重きを置いたのも、律詩の制約により言葉を尽して意を述べる事の拒否を嫌ったからとも言える。又、彼の作品に長編が多いのもその結果であり、叙情詩よりも叙事詩に彼の傑作の多い事とも関連する。以上のように、彼の作品は用語のみならず特に情景や内容把握の上で平易と言えるのであって、この点がかえって白氏軽俗の評を得ることにもなる。

其の二

長編の詩が多く存在する事は、彼の詩の特異性である。『甌北詩話』に次のごとく言う。「五言排律長編亦莫有如香山之多者、……此外如三十二十韻者更不可勝計、此亦古來所未有也」。又、言う。「唐人五言七言古詩大編、莫如少陵之北征、昌黎之南山、……然香山亦有遊王順山悟眞寺一首多至一千三百字、世顧未有言及者」と。すなわちその量においても質においても取り上ぐべきを述べている。今、ここに百韻以上の詩を上げるならば、〈遊悟眞寺詩一百三十韻〉、〈和夢遊春詩一百韻〉、〈渭村退居寄禮部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻〉、〈代書詩一百韻寄微之〉、〈東南行一百韻……〉の五首があり、その他数十韻の詩も多く存する。さて、〈遊悟眞寺詩一百三十韻〉において次の事柄が知られる。彼はまず山中の景を、次いで寺中の景、更に賓位亭等々と順次その景物を具体的に述し、霊境遺跡を細部に渡って描写している。思うに長編叙景詩は応々にして単調に陥り易い。にもかかわらずそれが感じられないのは何故であろうか。この詩にあっては、進行につれて常にその対象が変化している点があげられよう。その個々の対象すなわち景物について、言い伝えを交え、細部に至るまで具体的に叙する方法には変化がある。場面の転換につれて、詩人の目は同じ所に止まらない。この空間的描写の変化が、この長編叙景詩をして退屈させないものにしている。又、この詩の最後の一段で過去の身を振り返って現在の心境を歌う所がある。〈渭村退居詩一百韻〉にあっても、過去の追憶が強く表われており、現在の境遇が過去の追憶を通して更に未来への思いに至るのであって、時間的広がりすなわち時間的変化を見い出す事ができる。この時間的変化と先にあげた場面の転換すなわち空間的変化が、彼の長編の詩の中で特に強く作用しているのであって、〈東南行一百韻〉においては、この両者が巧みに結び合っている。現在の江州から思いは過去の長安の追憶へと走るのである。そもそも彼の長編の詩は、かかる変化を常に持つものであって、この変化が長編詩をして冗長ならしめないのである。あの〈長恨歌〉や〈琵琶引〉においても、同じくその特性が生かされていると考えられる。警奇な言葉をもってせず、字句を多く用い、なおかつその意を存分に達する為には、やはりこの変化の存在が必要なのである。

其の三

ここでは〈長恨歌〉を取り上げ、その主題について考えてみよう。この詩は、白居易自身が好むと好まざるにかかわらず、一般に流布した。元来小説でも同様であるが、歴史的人物を背景に描かれる場合、一般大衆に興味を抱かせるものである。時あたかも伝奇小説の流行した時代とも合わせて、人々に賞讃されたのは当然のなりゆきである。さて、美貌でもって帝の寵愛を一身に集めた全盛の楊貴妃の有様を第一段とし、次いで第二段では楊貴妃の死、第三段で主人公が玄宗に変り、彼の彼

女に対する思慕の情をそして第四段で道士招魂の場を描き、「天長地久有時盡、此恨綿綿無絶期」の言葉で締めくくる。人々を退屈させない変化と随所に詩的感情を抱かせるに足る技巧を駆使し、物語の世界に人々を引き入れると同時に別離の悲しみが人々の心情を強く揺さぶるのである。我が国の源氏物語と同じくみごとな叙事の世界と叙情の世界の融合である。さて、彼の作品〈新楽府五十首〉の中に〈李夫人〉の一首がある。描かれる対象すなわち主人公は異るが、〈長恨歌〉に全く似た筋書きである。「此恨長在無銷期」〈李夫人〉と表現まで類似しているが、最後の二、三連の句から明らかに諷諭詩と見なされる。彼の詩は、このように最終の数句により内容を規定する場合が多いのであって、〈長恨歌〉の場合、〈李夫人〉と同じ筋書きでありながら、「天長地久有時盡、此恨綿綿無絶期」の最終の二句が示すように、その主題は別離の深い悲しみにあると言える。〈長恨歌〉は、元和元年、彼が盩厔県尉に除せられた頃の作で、当時親友の元稹は中央で左拾遺の職にあった。ここで進士合格以来、孤独な彼の慰めとして存在した親友元稹、そして一生涯の友（比類をみない程多くの贈答詩からも類推できる）として心を許した友元稹との初めての別れが生じた。感傷的な詩人白居易が、心の友との別離の悲しみをこの〈長恨歌〉に託して述べているのではなかろうかと考えるのである。世人は、〈長恨歌〉を評して、政道の乱れを諷刺したものであると。又、最高のロマンの世界を歌うと。しかし、両者とも全くその的を得ていない。最後の二句に主題があり、あくまで親友元稹との別離の悲しみを内に秘めていると見るべきではなかろうか。彼は人物を借りて自己の姿を、そして心を吐露する事が多い。〈王昭君二首〉についてもその事が言える。そこには実感があり、人々に訴える何物かが秘められているのである。筋書きのみに人々は心引かれるのではない。〈琵琶引〉においても同じ事が言える。〈長恨歌〉は、彼の体験を通しての悲哀が内在する故にこそ、広く人々に感動を与えたと言えるであろう。

其の四

彼の詩を通じて随所に見られる文字として〝髪・鬢〟があげられる。又、これに類する文字を取り上げると驚くべき数にのぼり、これ等はおおむね白毛混じりの意に用いられ、老齢化を意味する表現である。一方、年齢を表わす数字も各所に見られる。「年忽過三六」、「四十垂白髪」、「三十生二毛」等あげれば枚挙にいとまがない。これ等は白居易の詩の特異性と見る事ができ、歳月の過ぎ去るの早きを恨み、人事のはかなさに対する嘆きを意味しているのである。恐らくは詩にもしばしば見られるごとく、彼自身、貧苦、病弱の苦労によって年若くして身体が衰えた事、それにも増して立身出世の遅れに焦りを感じた事が原因となって、常に自己の身を振り返る結果となったのであろう。これも又、白居易の感傷詩人としての特異性を表わすものであろう。

結び

詩は、詩人の心情を吐露すると言う。感受性強く、時には嘆きの底に、ある時は情熱を訴えたが、それは表面的環境の変化によるのであって、その根底には生来の感傷性が常に流れ、理想とするところいれられず、現実を見ては落胆にむせぶの情が多い。これは彼の少時の環境から来る人間形成によるものであって、やがて歳月と共に追憶に心を致しながらも現実に妥協する。後半仏道に親しみ、心を閑適ならしめる詩が多く作られるのもその間の事情を物語っている。今回、白居易詩の前半から、心情の変化と詩の特色を述べ、その人間性追求の一端とした次第である。

参考資料

汪立名編『白香山詩長慶集』・趙翼著『甌北詩話』・鈴木虎雄著『白楽天詩解』
Arthur Waley "The life and times of Po Chü-I" ・文学古籍刊行社編『白香山集』・王拾遺著『白居易研究』・陳寅恪著『元白詩箋稿』・花房英樹著『白氏文集の批判的研究』・花房英樹著『白居易研究』

概要

白居易詩の前半を見るに、時には諷諭詩をある時には閑適詩を歌うも、飽くまでその根底に流れるものは感傷の情であって、やがて時と共に追憶に心を致しながらも、悲しみから逃避し現実に妥協していく姿を描くと共に、彼の特異性である平易性は説明的表現にあるとし、長編詩にあっては時間・空間の変化が詩を冗長から救っている点、そして〈長恨歌〉の主題は彼の別離の情から発した事、最後に感傷的表現についての各点に関して考察を試みた。

昭和六三年四月十一日受理

一般教養科*